

10. 笠・みの・さなぶり

農家にも洋服が普及する以前は、笠と蓑は農作業に欠かせない服装だった。蓑はレインコート。田植えが終わるとサナブリという楽しい休みがあった。

バッチョガサ

<A>はバッチョガサで直径 53 cm。奇妙な名だが国語辞典には、ばんじょうがさ（番匠笠）の変化した語かとある。番匠は大工さんを指す中世語。中世絵画では番匠は鳥帽子をかぶるが、笠をきた場面は見ない。近世以降も笠きて家を建てる大工さんはイメージしにくい。「番匠笠」説は無理ではないか。<A>～<C>は奇贈品で聞取りメモはない。

ミノ

はミノ（蓑）。藁製で裾幅 130 cm、高さ 87 cm。別府からの奇贈品。

ゴザミノ

<C>はゴザミノ。幅 77.5 cm、高さ 95 cm裏に空色のビニールが重ね縫いされている。

コシミノ（腰蓑）

<D>はコシミノで、鳥飼上の I 氏の復元作品。腰に巻いて前で合わせ、細かい藁縄をサスペンダーにしている。藁よりスゲ（菅）が水が染まないのでもいいという。

鎌倉時代も笠と腰蓑

<E>は山口県の防府天満宮にある「松崎天神縁起」絵巻から模写したもの。牛を追う百姓は「バッチョ笠に腰蓑姿である。鎌倉時代後期の百姓の姿だ。

サナブリ

田植えが終わって 1 日休むのがサナブリ。村で決めて隣組みで連絡した（鳥飼中）。サナブリは年によって総代が決める。村の小使い係を勤める人が「〇〇日サナブリでっせー」とふれて回る。小遣いさんは農家ではなかった。よそから来た人だろう（千里丘）。サナブリには大きボタモチを作った（千里丘）。

ドタにはヒル（蛭）が

ドタには蛭が多い。女の人足は紺パッチを履いた。「鳥飼と別府には嫁にやるな」と言われた（別府）。

田に蛭はようけいてました。ドンヒルという。ウシドンビルという大きなものもいた。足浸けたらシャーシャーシャーシャーと寄ってきた。血吸うてコロソと落ちよったこともおました。ヒルタビ（蛭足袋）履いて田に入った。布で縫うて上と下に紐を付けた。蛭には泣かされました（別府）。

A



C



B



D



E

